



Title	モンゴルの飼料市場形成段階における飼料産業の展開論理：集約的畜産の成長と畜産インテグレーション [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	GANBAT, Usukhbayar
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	甲第12245号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61584
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Ganbat_Usukhbayar_review.pdf, 審査の要旨



学 位 論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称 博 士（農学）

氏名 GANBAT USUKHBAYAR

審査担当者 主 査 教 授 坂 爪 浩 史
副 査 教 授 坂 下 明 彦
副 査 教 授 近 藤 巧

学 位 論 文 題 名

モンゴルの飼料市場形成段階における飼料産業の展開論理
ー集約的畜産の成長と畜産インテグレーションー

本論文は序章・終章を含む7章からなり、図9、表 25、文献 52 を含む総頁数 72 の和文論文である。別に2編の参考論文が添えられている。

モンゴルにおいて 1990 年から開始された「市場経済化」は畜産業に大きな影響を及ぼした。飼料のほとんどを自然草地に依存する遊牧から、濃厚飼料に依存する集約的畜産の増加に伴い、飼料市場が新たに形成され、飼料輸入が急増してきた。しかし、輸入飼料の供給は必ずしも円滑に行われているわけではない。また、飼料産業が畜産業に進出し、逆に畜産経営が飼料産業を内部化するというインテグレーションの動きも現れてきている。畜産業の在り方を展望する上でも、国内における飼料生産・供給体制の確立のため飼料産業について体系的に検討する必要性が高まっている。モンゴルにおける飼料および集約的畜産に関する研究は、小宮山、サンガジャブ等によって行われてきたが、これらの研究は酪農を中心とする畜産経営の分析を主としており、飼料市場に関する分析は行われていない。

本論文では豚、鶏などの中小家畜も含めた集約的畜産に焦点を当て、畜産経営と飼料産業の統合、いわゆる畜産インテグレーションにも注目しながら、モンゴルの飼料市場形成段階における飼料産業の展開論理を明らかにすることを課題とした。直営方式によるインテグレーションについては、宮崎宏の定義に沿って“資本自ら生産手段を所有した、「農場所有型統合」”として捉えている。上記の問題意識を序章で整理した後、各章において実証分析を行い、以下の諸点が明らかにされた。

第1章では、モンゴルにおいて飼料生産が回復傾向にあるものの、依然として飼料生産・供給体制が確立されていないこと、輸入配合飼料の購入を前提とする大規模集約的畜産農家の成立によって、従来と異なる飼料市場が形成され、拡大していることを明らかにした。

第2章では、畜産物生産を主導する大・中規模の畜産農家において、飼養規模が拡大する一方、価格高騰などによって飼料購入が困難となり飼料の自家生産・自家配合が増加しているが、こうした自家飼料の栄養不足や飼料生産にかかわる技術者不足の問題から、利便性が良く、労働力削減にもつながる購入飼料を利用し、畜産物生産に専念したいという意向が強いことを解明した。

第3章では、中国飼料メーカーを取り上げ、これらメーカーによるモンゴル向け飼料輸出は受動的であり、利益確保が困難であるなど、流動的な要素が大きいことを明らかにした。

第4章では、穀物主産地である TUV 県を事例に分析を行い、政府の耕種農業回復政策によって小麦生産量がほぼ自給を達成するなど一定の成果を挙げる一方、その終了によって穀物から輸出作物への転換が生じていること、飼料原料生産は自家消費用の粗飼料生産に留まっているなど、不安定な状況にあることを明らかにした。

第5章では、飼料産業が直営農場を開設し、大規模畜産経営も飼料工場を建設するなど、畜種

別に専門化した直営型の畜産インテグレーションとして展開し始めていること、その要因は、飼料工場の低稼働率、輸入飼料依存体質からの脱却策の必要性にあることを明らかにした。

以上の実証分析を踏まえ、終章において総合的な考察を行った。モンゴルにおいては都市近郊型・大規模集約的畜産の成長に伴って配合飼料市場が形成され、拡大している。しかし、国内においては飼料生産・供給体制が確立されておらず、個別農家において自家生産・自家配合飼料が増加しているが、飼料技術者・労働力不足、品質バラツキの問題が生じている。さらに輸入飼料の安定的な供給が困難な状況にあるなか、飼料産業においては畜種別に専門化し、畜産経営と統合した直営型の畜産インテグレーションが展開している。このような飼料市場形成期におけるインテグレーションの展開は、国内において飼料技術が確立されていないことへの対応であり、実験農場としての性格が強いといえる。したがって、飼料技術が確立した後には、契約生産が拡大していく可能性が高い。インテグレーションは飼料市場と集約的畜産の成長を促す効果が期待できる一方、配合飼料メーカーによる零細かつ小規模集約的畜産農家の掌握も懸念される。政府としては、制度的インフラの整備、専門的な飼料生産企業の育成のための支援策を実施することが望まれる、とした。

このように、本論文は濃厚飼料に依存した集約的畜産が勃興しつつあるモンゴルにおいて、飼料市場形成段階における飼料産業の展開過程を後付け、その論理を解明したものである。特に、飼料産業、畜産業両面から進む直営型インテグレーションの実態を明らかにし、さらにその性格を、市場形成段階における実験的、過渡的なものであると解明したことは高く評価できる。

よって審査員一同は、GANBAT USUKHBAYAR が博士(農学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認めた。